

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) gen-free@wako.ac.jp

GF EVENT

2025年度ジェンダーフォーラム卒業論文・卒業制作発表会



2025年度の卒論・卒制発表が、2026年1月14日（水）13時より、G棟1階のジェンダーフリースペースにて対面とZoomミーティングの形で開催されました。発表者は3名で、いずれも卒業論文の報告でした。発表者は次のとおりです。

(1) 下口紗弥さん「〈女性アイドル〉の通史的研究」（総合文化学科、主査：津田博幸先生）、(2) 慕孟麗さん「日本におけるキレイ暴力」（人間科学科、主査：挽地康彦先生）、(3) 土屋優さん「男性スカートの着用とステレオタイプの繋がり—女性を対象としたインタビュー調査—」（心理教育学科、主査：小松賢亮先生）。



▲下口紗弥さん

下口紗弥さんの卒業論文は、古代から現代にいたる「女性アイドル（的存在）」に着目し、同性である女性がどのように「女性アイドル」を語ってきたのかについての研究でした。当日の発表は、卒論全体の説明ではなく、平安時代の文学作品（『紫式部日記』『更級日記』）を題材として取り

上げた章の解説でした。『紫式部日記』については、書き手（紫式部）が「中宮」「宰相の君」を語る際の語彙から修辞法までを詳細に調べ、目の前の魅力的な女性の外見や内面を同性がどのような言葉で賛美しているかを明らかにします。『更級日記』については、書き手（菅原孝標娘）が足柄山麓の宿で遭遇した3人の遊女を語る場面を分析します。遊女の声や容姿に加え、「いづくよりもなく出で来た」彼女たちの異界性にアイドル的要素を読み取る試みを興味深く聞きました。

アイドル信仰は、語り手（ファン、信者）がある物象（アイドル、偶像、神体、本尊）との間に物語（神話）を構築することで成立します。その意味では、足柄山の遊女の非日常的な異界性は物語装置としてうまく機能します。一方で『紫式部日記』では、語り手と語られる女性の関係性が一見日常的に見え、アイドル的物語がどのように生じるかが重要になります。物理的には近距離に見える両者の関係だが、そこには越えられない立場の違いがあり、「手の届かない異次元の存在」が対象になることで同性間のアイドル信仰の要素が生じるという、同席された津田先生の追加コメントもたいへん参考になりました。

慕孟麗さんの卒論発表では、まず「キレイ暴力」という表現の説明がありました。一般的に「ルッキズム」で語られる容姿の問題ですが、「ルッキズム」という単語は、差別を指摘する文脈では有効でも、そこにはたらく権力・

支配の構造を必ずしも明らかにしない。そこであえて「キレイ暴力」という表現を用いて外見至上主義の「暴力性」を前景化するという事です。



▲慕孟麗さん

発表は卒論各章の概要を説明する形でしたが、それぞれの章のテーマに関わる先行研究や重要文献（デュルケーム、ヴァージニア・ウルフ、上野千鶴子…）を踏まえた説得力のある解説が続きました。検討項目は、卒業アルバムの外見評価の暴力性、ショップ店員の外見評価と能力評価の関係、メディアや広告表現における「見る／見られる」の「支配／被支配」構造、社会の「公／私」における男女の権力構造、文学や歴史での「女性の語られ方」など多岐にわたっていました。項目ごとに日本の現状から問題となる具体的事例を指摘し、最終的に社会構造や個人意識の変革の必要性を投げかけます。「キレイ暴力」「ルッキズム」の点から切り込みますが、検討内容は、容姿や外見の話を越え、日本社会の男／女の権力構造に踏み込んでいきます。

日本も各局面で見れば男女平等が進んでいるように見えます。しかし今回の発表でも示されたように、根本的には大きく変わっておらず、それが世界のジェンダーギャップ指標の下位から動かない事実にも表れているのでしょう。筆者個人としては、慕さんの発表の「余談」にあった一節、「私たちは仕組みや社会構造に目を向けるあまり、かえって自分自身の可能性を見失ってしまうのではないか」「個人として世界を生きていくためには、ある程度の無謀さが必要なかもしれない」の言葉が印象に残りました。自分を取り巻く世界にばかり意識が向くと、個の存在を軽視しがちになります。規範を逸脱する個々のアクションの積み重ねが世の中を変える——次の土屋さんが言及した、女性の服装の自由度もこの結果でしょう——ことからしても、「ある程度の無謀さ」はうまい表現だと思いました。

土屋優さんの研究は、「スカート」を主題に、男性のスカート着用について多角的な方向から調査するというものでした。かつて日本の学校では、「男子の制服＝詰襟

／スラックス」「女子の制服＝セーラー服／スカート」という時代がありました。発表でも説明されていましたが、女性の服装の領域は大きく拡大し、昔は「男の服装」だったものが当たり前のように女性の服装に取り込まれています。学校の制服は「女子の制服＝スカート」が続いていましたが、今や女子制服でもスラックスが広く受容されるようになってきました。その一方で、男子生徒の制服でスカートが受け入れられる傾向は見られません。



▲土屋優さん

土屋さんの発表では、「男性のスカート（的服装）」着用の事例を歴史的に確認するところから始まります。世界各地には男性のスカートが伝統衣装になっている例が見られるものの、日本では規範的イメージから男のスカートは否定的にとらえられています。その抵抗感をさらに掘り下げ、男のスカートについて、男性がもつ感覚と女性もつ感覚を検討します。そこで見えてくるのは、男性にもさまざまなアイデンティティがあり、それぞれの性自認によって「男のスカート」に対する受けとめ方も異なるということです。一方で、女性の側からすると、男性がスカートを着用する理由、スカートを着用する男性の容姿、着用する男性との関係性などによって、受容の可否に差が出てくるという報告でした。

下口さん、慕さんの発表の質疑応答では、出席者の中である程度の問題意識の共有があったように思えました。しかし土屋さん発表の質疑応答では、質問・発言する人の立場や自己認識によって着眼点や問題意識の持ち方がバラバラだった感がありました。バラバラだったのは悪いことではなく、それだけ「男のスカート」については考える際の視座が多く存在するということであり、多様な角度・側面から検討する可能性があると考えられます。今後の世の中での受容の動向とともに考察が続いていくのではないのでしょうか。

今回の3名の発表は、ジャンル、分野、議論の方向性がそれぞれ異なり、ジェンダーの問題が領域横断的に多様な考察につながることを示していました。社会で生きている以上、ジェンダーの問題と無縁である人間はいません。今後も独自の視点からさまざまな興味深い考察が生まれることを期待しています。

(中田崇・ジェンダーフォーラム担当教員／人間科学科)

GF EVENT

2025年度デートDV防止啓発講座

<2025年11月20日(木)開催>

概要

和光大学では、町田市とジェンダーフォーラム共催で、例年、デートDV防止啓発講座を開催しています。今年も、11月12日(水)～25日(火)の「女性に対する暴力をなくす運動」(内閣府男女共同参画局)の期間に、講演会方式で開催しました。講師はNPO法人レジリエンスの西山さつきさんです。この講座は、本学の学生に対し、デートDV防止を啓発する目的で開催されています。「法と人権」(経済学科・徳永貴志先生担当)の履修者を対象としていますが、「労働と経済」(同学科・堀川祐里先生担当)の履修者も今回は加わり、それ以外にも希望する学生や学外の人にも自由に開かれている講座です。

デートDVとは

DVとはドメスティック・バイオレンス(親密な関係での暴力)の略称で、夫婦間や親密な関係での暴力を指しています。しかし、「DVは大人の問題」「DVは夫婦間での暴力」と誤解されることが多いため、恋人同士でも起きるということを印象付けるために「デートDV」という和製英語ができました。10代のカップルでデートDVが起きている割合は3組に1組で、身近に起こりうる問題なので、このような継続した啓発講座が必要だと思います。



▲講師の西山さん

NPO法人レジリエンスの紹介

DVや虐待、モラハラ、いじめ、パワハラ、その他

さまざまな原因による心の傷つきやトラウマに焦点をあて、情報を広げる活動をしているNPO法人です。(ウェブページより引用)

講座、研修、ブログ(note記事)、動画配信などの実施を通して啓発を広げています。

印象に残った点

私の学生時代を振り返ってみても、正面切って「それは暴力だよ!やめなよ!」と抗議するのが難しい場合がほとんどだと思います。そういう場合でも、例えば、飲み会などで危ない目に遭いそうな人が居たら、さりげなく助け船を出して気をそらし、暴力にならないようにかわすなどの方法があるとのことでした。こうした場面のほうが、日常では多いと思うので、とても実践的で参考になりました。

講座内容からいくつかピックアップ

1. 支配があるかのチェックリスト
目に見えない支配や権力があるかをチェックしてみてください。いくつ当てはまるとDVという診断ではなく、パートナーからの支配やコントロールがあるかチェックします。
2. 性的同意を、人に紅茶を淹れて出す場面に例えた動画
自分が相手のために淹れた紅茶を、相手は気分じゃなくて飲まないかもしれません。そんな時、普通は、相手の口に紅茶を無理に流し込むことはしませんよね?このような例を、性的同意を取ることに例えたアニメーション動画が紹介されました。
3. 人間の脳
被害に遭い、危険な状態にあるとき、人間の脳は理性的に考える働きが機能せず、「逃げるか、戦うか、凍り付くか」のサバイバルモードの脳になります。ストレス耐性がなくなり、白黒思考になりやすい状態です。人間らしい、自分で決める力を持つ脳の機能を取り戻すには、人とのつながりで癒されることが大切です。
4. DVが及ぼす子どもへの影響
 - DVの目撃は児童虐待にあたります。
 - 健全な人間関係を学ぶ機会が限られることがあります。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)

文中でご紹介した資料と動画はこちらからご覧いただけます。



- ① 支配があるかのチェックリスト (NPO法人レジリエンス)
- ② 性的同意を、人に紅茶を淹れて出す場面に例えた動画

<受講した学生たちのコメント>

今回の授業を通して、DV が子どもにどのような影響を与えるのか考えました。正直、DV は「大人同士の問題」というイメージがありましたが、授業では、子どもへの影響がとても大きいことに驚きました。特に、子どもが暴力の場面を目撃するだけでも、児童虐待として扱われるという点が印象的でした。DV のある家庭では、子どもは安心できる環境を得ることができず、常に緊張した状態で生活します。安定した養育環境が整わないことで自分の気持ちをうまく表現できなったり、心の発達に影響が出たりする可能性があり、また、精神面だけでなく、身体的な危険や性的被害につながる可能性が高まるとされていて、家庭が安全でないことの深刻さを改めて考えることができました。さらに、ACE（幼少期の逆境体験）についても印象的でした。ACE とは、暴力やネグレクト、家庭の崩壊など、子ども時代のつらい経験を指しており、幼少期の逆境がその後の健康リスクや行動面、早期死亡といった結果につながる可能性があること示されていました。つらい経験が積み重なることで、大人になってからの病気や人間関係の問題にも影響してしまうということを知り、とても重い現実だと感じました。

(学生・心理教育学科)

「デート DV は 3 組に 1 組のカップルで起きている」というデータが紹介されていましたが、それを聞いたときは「多すぎではないか?」と疑問に思いました。しかし、授業が進むにつれて、DV は殴る・蹴るといった暴力だけではなく、言葉や態度、無視や束縛なども含まれると知って、数字の意味が分かった気がしました。DV=暴力と変換し、イメージしていた範囲が狭すぎたのだと思います。また、相手に合わせすぎたり、怒らせないようにするというような、行動が縛られる状態も DV に含まれるという説明が印象に残りました。友達や恋人と付き合う際には「気を遣わない人がよい」と言う意見がよく出ますが、今回の授業を受けて、それが本当に大事なポイントなんだと実感しました。相手に遠慮しすぎたり、必要以上に機嫌を窺わなければいけない関係は、かなりしんどいと思うし、それが積み重なると自分でも気づかないうちに関係が変わってしまう可能性もあると思います。自分の周りから、DV 経験についてこれまで聞いたことはないですが、この授業内容を知っておくことで、将来なにか違和感を覚えたときの

判断材料になると感じました。頭の片隅に置いておき、周囲の人間関係をもう少し丁寧に見られるようになりたいと考えました。

(学生・経済学科)



▲講演会の様子

「デート DV」に関する特別講義は、「10 代カップルで 3 組に 1 組が DV を経験している」というデータから始まり、私の認識を大きく変えた。これまで「DV は身近ではない問題」と漠然と思っていたが、講義で示された「DV のサイクル」（緊張感緩和→高まり→喧嘩→謝罪・甘え）の図は、「日常的なトラブルから暴力に繋がる」という現実を具体的に描いており、衝撃的だった。特に「『怒りが湧いたら暴力を振るう』のはストレスの発散方法として間違い」という指摘は、「感情のままに行動するのは自然」と思っていた偏見を正してくれた。また、人との関係で「相手の立場を尊重する」具体的な方法を教えてくれた点が印象的だった。これまで「親切にする」ことに重点を置いていたが、「自己主張と傾聴を両立する」ことが健康な関係の基盤であることを実感した。さらに、「友達が被害に遭っている場合、一人で解決することを促すのは危険」というアドバイスは、「干渉しない方が親切」という誤った考えを持っていたと気づかされた。「周囲のコミュニティで支える」ことの重要性を知り、今後は身近な人の変化に敏感になるよう意識したい。この講義は、「DV は『他人事』ではない」という認識を深め、「自分自身や周囲を守るための具体的な行動」を学べた点で非常に有意義だった。

(学生・経営学科)

MOVIE REVIEW

女らしさと自分らしさの矛盾



『桐島、部活やめるってよ』(映画) 紹介
監督：吉田大八、出演：神木隆之介、東出昌大、橋本愛／劇場公開：2012 年

朝井リョウの原作小説が、和光大学附属
梅根記念図書・情報館に所蔵あり
(2026 年 3 月時点)

スクールカーストを描いた青春群像劇

朝井リョウの小説『桐島、部活やめるってよ』の映画化作品である。学内の中心人物である桐島が部活をやめるのか、やめないのかということに右往左往する、周囲の生徒たちが描かれる作品だ。肝心の桐島は、原作でも、映画でもはっきりと登場しない。スクールカーストという学校内の序列を経験したことがある人なら、苦しく心がヒリヒリ痛むだろう。だが、観終わると、学校生活などで生きづらさを感じている人たちへ応援歌だとわかる。監督が男性であるからか、カースト下位の陰キャな男子生徒（演・神木隆之介）やカースト上位で空虚を抱える男子生徒（演・東出昌大）にスポットライトを当て、共感を呼ぶ演出である。映画を観れば、「男の子の生きづらさ」は十二分に伝わってくるので、ここでは敢えて触れない。

それに対し、女子生徒（演・橋本愛、松岡茉優、大後寿々花）の描き方がやや記号的で「嫌な女だよ」「モテない女だよ」以上に深掘りされていない点が残念である。それでも、彼女ら女子生徒を演じた俳優たちの力量や脚本の力により、伝わってくるものがあつた。

沙奈と亜矢

野崎沙奈（演・松岡茉優）は、女子らしい身のこなしや言動、あか抜けたメイクや制服の着こなしが絶妙に上手く、これらの能力によってスクールカーストという学内のヒエラルキーの上位になったとみえる。さらに、学内のカースト上位である宏樹（演・東出昌大）とクラス公認で交際中だ。宏樹は、野球部ながら、体育で全力を出さずに、サッカー部の男子にサッカーで圧勝するほどの運動神経の持ち主。加えて、端正な顔立ち、高身長、長い脚を持つパーフェクト彼氏だ。その彼氏に、真面目一辺倒な地味な吹奏楽部の沢島亜矢（演・大後寿々花）が片想いしている。交際相手として当然の感情だが、沙奈は、亜矢のことが目障りだ。

他者評価依存の心許なさ

カースト下位の映画部の男子たち（演・神木隆之介ら）を馬鹿にするなど、周りを見下した態度に、「性格が悪い」

と観客に嫌われそうな沙奈だが、私は彼女が気になる。

映画の後半で、沙奈はある方法で亜矢に一矢報いる。見ている「沙奈、酷い!」とも、必死な沙奈に「なんて可哀想!」とも思う、なんとも矛盾した気持ちになる。

想像するに、沙奈は本当は自分に自信がなく、「人（なかでも、男子）にどう良く思われるか」だけを気にしている。女の子らしく甘えて、しなをつくるのが沙奈の生き方で、沙奈はそのカードしか持っていない。沙奈の価値を評価する主体は、自分自身ではなく、「男=宏樹=自分以外の他者」という心許ない状態だ。やがて若さが失われたら女の子らしさカードも使える場面は減るだろう。

ひきかえ、恋敵(?)の亜矢は、吹奏楽部で部長をつとめ、皆をまとめ上げながらサックスに邁進する自分らしい生き方ができている。亜矢の価値を評価するのは、他でもない、亜矢自身になりうる。

そんな亜矢に比べ、男や他者に翻弄される沙奈。カースト上位、イケメン宏樹に彼女として選ばれ、なんでも持っていそうな沙奈は、実は、なにも持っていない。だからこそ、強力なカードである宏樹にしがみつくしかない。

どちらを選んでも損をする

亜矢は、自分の軸となるサックスがあり、自己評価を自分でできる自由さがある。しかし、好きな男の子には好かれられないし、カースト上位の男子に「モテない女」と馬鹿にされており、社会から勝手に低い評価を受ける。沙奈は、女らしさを戦略的に使い、イケメン彼氏をゲットし、社会的に得をするが、他者評価依存、自分で自分の価値を決められないため、自信のなさや不安定さにつながる。

この社会では、男らしさは自己評価をすることと、女らしさは奥ゆかしさなどの他者評価依存と紐づけられている。そのため、自己評価し、自分らしさを発揮することと、女らしさは葛藤になる。そして女性は、自分らしさと女らしさの両方を求められ、両立しないこれら二つの矛盾に引き裂かれる。

亜矢のように自分らしく生きれば、自己評価する自由と引き換えに、恋愛においては評価されない可能性がある。一方、沙奈のように女らしさを利用すれば、他者の期待に応え続けなければならない、自己を見失いやすい。これは個人の責任や弱さの問題ではなく、どちらが正しいわけではない。

どちらを選んでも損をする社会構造そのものに問題があるのではないだろうか。この二択を強いられているために、女子の生きづらさは、男子のそれよりねじれている。

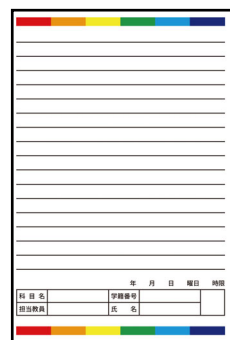
(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)

町田レインボーミーティング活動報告

町田レインボーミーティングは、町田市男女平等推進センターと三井住友信託銀行町田支店が音頭を取り、市内の事業所に声をかけ、性の多様性に対する理解促進の取り組みを共有する場として始まりました。2024年3月から2026年2月まで、町田市役所市民協働おうえんスペースや町田市民フォーラムを会場として、7回ほど開催されています。ジェンダーフォーラムでは、代表が継続的に参加してきました。

初回の集まりは2024年3月22日（金）、プライドハウス東京から野口亜弥氏を講師に招き、スポーツの分野におけるLGBTQ+にかかわる事例を学習しました。野口氏は本学にもゆかりがあり、共通教養科目を長くご担当されています。

その後もミーティングは続き、2025年度に入ると、6月のプライド月間には、町田市が市庁舎・JR町田駅前ペDESTリアンデッキを虹色にライトアップ、三井住友信託銀行町田支店やマルイ町田店が店内・店外にLGBTQ+にかかわる啓発のディスプレイを行うなど、参加している各事業所が取り組みを行いました。



▲レインボーカラーのコメントペーパー

ジェンダーフォーラムでは、学内における啓発活動をまず地道に行おうとのことから、レインボーカラーのアクセントを配したコメントペーパーを2,000枚ほど用意し、先生方にお使いいただきました。使用にあたってのご申告は不要としたので、使われた先生方の人数や科目数は不明ですが、7月に入ったところですべてなくなりました。個別にお聞きしている範囲では、専任教員・非常勤講師を合わせ、十数名の先生方が使ってくださいましたようです。



▲いつもと違う虹色にする塗り絵をする子どもたち

また、2025年6月28日（土）には、日本フットサルリーグ（Fリーグ）のベスカドーラ町田のホームゲームにおいて、町田市男女平等推進センターが啓発ブースを出展、リーフレットの配布や、子どもたちに、同チームのマスコットをいつもと違う虹色にする塗り絵をしてもらうなどの取り組みを行いました。ジェンダーフォーラムも、代表と学生2名が参加しています。

ミーティングは、2026年2月17日（火）が第7回、新年度の活動についての意見交換を行いました。ジェンダーフォーラムとしても、引き続いてかかわりをもっていければと思います。

（杉本昌昭・ジェンダーフォーラム代表／経営学科）

周縁化された「世界への優しいまなざし」

「アンチ・アクション

彼女たち、それぞれの応答と挑戦」紹介

東京国立近代美術館

2025年12月16日（火）～2026年2月8日（日）



2026年1月30日（金）に訪れた展覧会の紹介である。第二次世界大戦後に巻き起こった前衛芸術の新しいトレンド「アンフォルメル」「アクション・ペインティング」「もの派」「具体美術協会」などに、女性たちの姿もあった。しかし、次第に「足で絵を描く（白髪一雄）」など力強いパフォーマンスを伴う、男性芸術家ならではの表現に注目が集まる中、女性芸術家たちは美術批評家（美術雑誌で活躍する批評家はすべて男性）から、正当に語られることなく、忘れ去られ、周縁に追いやられた。「アンチ・アクション」と題したこの展覧会は、そうした「パフォーマンス重視」「賑やか」「驚かせる」に価値を置いたアクション的な前衛芸術へのアンチテーゼである。全体的に、色合いや、かたちが目に優しい心静かな作品が多い印象だった。それはステレオタイプ的な「女性らしさ」というより、芸術家たちの「この世界への優しいまなざし」だと感じた。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）



▲展覧会フライヤー及び専門家による解説

ジェンダー・スタディーズ・プログラム紹介

＜ジェンダー・スタディーズ・プログラムとは＞

このプログラムは、和光大学のすべての学生に開かれており、教職課程のように別途単位修得しなくても、ジェンダー関連科目を系統的に単位修得（20単位以上）し、卒業年にレポートを提出することで修了となります。ジェンダー関連の科目を履修している・履修しようと思っている学生は、是非申請してください！

卒業年に所定のレポート等を提出し修了が認められると、卒業時に「ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書」を発行します。この証明書は、教員免許や司書などとは異なり、直接就職につながる国家資格ではありませんが、ジェンダー関連の知識を身につけた証となり、就職活動や社会生活に活かすことができます。

＜プログラム修了までに必要なこと＞

STEP1 [1～4年次の4月]

プログラム履修申請 ※何年次でも申請できます！

毎年4月にプログラム履修説明会を開催し、申請を受け付けています。説明会に出席せずに申請することもできますが、初めて申請する学生は是非説明会にご参加ください。

STEP2 [履修申請後毎年]

「プログラム履修状況表」の提出

一度申請した学生は、原則毎年、STEP1の申請受付期間中に「プログラム履修状況表」を提出することが必要です。毎年、提出することでジェンダー関連科目の履修状況を振りかえり、プログラム修了に向けての見通しを立てることができます。

STEP3 [卒業年次]

レポート等の提出

3月に卒業する場合は1月頃、9月に卒業する場合は6月頃に、所定のレポート（レポートⅠ、レポートⅡ）および「プログラム履修状況表」を提出してください。

*科目群Ⅰ・Ⅱ、その他プログラムの詳細は、学内で配布している「ジェンダー・スタディーズ・プログラム」リーフレットや、『学修の手びき』でご確認ください。

2025年度から2026年度へ



▲寛げる交流スペース。お昼ごはんを食べたり飲食自由です。

学内の居場所の一つとして

ジェンダーフリースペースには、ジェンダーに関する本やDVDなど資料があり、ジェンダーに関する情報提供も行っていきます。それだけでなく、ゼミやサークルなどとはまた別な人間関係を見つけて構築できる、「学内の居場所の一つ」となっていると感じる年でした。中心に「人」があり、ジェンダーに限らず、いろいろな話題を安心して対話できる場になっていると感じます。



▲ジェンダー関連の資料があります

安心して対話できる場に

対話には、安全な場所で、安心して発言できる環境が大切です。ジェンダーフリースペースは、好きな話、率直な意見が言える、対面ならではの良さを生かした交流スペースであることを心がけています。ぜひお話ししにきてくださいね。話さなくても、ただ来て座っていてもいいし、資料や情報を得たいときはスタッフがお手伝いします。お待ちしております。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)

<修了者数と論文タイトル>

2023年度～2025年度のジェンダー・スタディーズ・プログラム修了者数と、レポートIとして提出されたレポート（卒業論文、卒業制作で代替可）のタイトルを一部ご紹介します。

2023年度 5名修了

- 卒論「児童養護施設における性的マイノリティの子ども支援の実態に関する考察」
- レポート「性の対立と問題の所在」
- レポート「『かっこいい』と『かわいい』に付随するイメージ —特になろう系におけるの男女の比較—」
- レポート「『プリキュア』からみる育児の強制」
- 卒論「ジェンダーの視点から見る女性アイドル」

2024年度 2名修了

- 卒論「虐待防止策としての『物語の共有』—社会教育にできること—」
- 卒制「異星人レオ」（小説）

2025年度 3名修了

- 卒論「性・ジェンダー教育の可能性 —日本の性教育史と実践を手がかりに—」
- 卒論「日本における『キレイ』暴力」
- レポート「女性の労働問題について」



▲ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書（見本・表・裏）